

日本人の

れもの

vol.11



京都、こころここに

繊細な感性

師 大西清右衛門さん



おおにし・せいえもん 1961年、京都市生まれ。大阪芸術大学美術学部彫塑科卒。93年に千家十職の釜師、16代大西清右衛門を襲名。2006年に京都府文化賞奨励賞受賞。京都市中京区に「大西清右衛門美術館」を併設した工房がある。著書に「茶の湯の釜」。

昔の人は
ゆったりとした
時間を生きていた

しんとした茶室の中。やがて、ちゅっ、と小さな音が聞こえる。釜の中の水が少しづつ沸き始める音である。身動きもしていれば気づかないほどに微かな音を、蚯蚓鳴きと呼ぶ。湯が沸き起るにつれ、虫の声は次第に遠き波のごとく、ついに雷声のごとくと聴えらる。特に、しゅうしゅうと沸き起るさまは、うら寂しい海岸の情景になぞらえて松風と呼ばれ、侘び茶の心を象徴する言葉ともなってきた。



茶の点前は、刻々と変化する釜の音とともに進んでゆく。高く鳴っていた釜、柄杓でひと汲みの水を注ぐ。すうっ、と静まり返る湯。茶事が終わりに近づくと、れ、だんだんと炭が勢いを失い、鳴りが低くなる。

に、なんとゆったりとした時を生きていたことか。今更ながらに感慨を覚える。電子音に慣れ、分刻みのスケジュールをこなす現代人には、なかなかできない発想である。

「やつれ」朽ち...
失われたものの
気配や時間

深い静寂を生む
釜の音に
思いを馳せる



静寂の中の茶釜。これからの釜の音を醸し出すか。

それがまたもの寂しく、茶事の余韻を残す。今改めて考えてみると、このように湯の煮え音を聞き分けて愉しんでいたとは、なんと昔の人は心豊かであったことか。今よりも不便で、人の寿命も短かったはずなの

の境地で笑いたい。釜は、鉄を素材とすることから、朽ちて行くことが宿命だ。何百年もの長い年月を味わっていきつち自然にできた荒れを味わいとして観賞する。そして、とんと古びて破れたり欠けたりしたもの姿を「やつれ」と呼んで愛する。茶の湯の世界ではそのように、釜の朽ちゆく特性に美を見いだしてきた。釜師が新たな釜を作る場合も、ただツルツル力ときれいに仕上げるのではなく、「朽ち」を、つま



戦後、日本人は物の豊かさや引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

虫の声、雷声、松風...のごとし 釜の音を聞き分ける豊かな心

日本の暦

鶴鶴鳴く

(9月13日・17日)

9月の中旬近くになると、溪流や川などの水辺で鶴鶴が鳴き始めます。鶴鶴は雀のような小鳥ですが、長い尾を上下に振る習性があり「石たたき」とか「庭たたき」とも呼ばれる小鳥。いつもせわしなく尾を叩きつけるように振るからでしょう。また、伊弉諾尊と伊弉冉尊が鶴鶴の交尾をみて、無事に結婚できたという神話に由来して「恋婚を鳥」の異名もあります。「行く水の目にとまらぬ 青水沫 鶴鶴の尾は 触れにたりけり」という美しい歌は北原白秋の作。



歌人 永田 紅さん

■言葉のこす
昨年8月、64歳で母が亡くなった。乳がんだった。母は河野裕子という歌人で、入院中も、在宅看護に移ってからも、原稿を書き、新聞歌壇の選歌を続けた。ベッドの上で、仰向けのまま投稿歌のハガキを綴っていた姿を思い出す。先日、母のマトレスを手そとて、ああ、と思った。作った歌は、ベッドの上で手帳に書きつけていたが、鉛筆を持つ力がなくなると、家族が口述筆記をした。亡くなる前日、父が聞き取った、

手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が

が母の最後の歌になった。死の直前まで、母に歌を作らせた力は何であったらう。傍で見てみると、それは無理をしているというよりも、母にとつてごく自然なことのように感じられた。歌の数々は、今も母の存在を身近に留めてくれている。お守りのように。日々まきまされて多くの言葉は流れていってしまうがただこれ、言葉のこす」といつか、「言葉はこる」といつかを思う。

(次回9月18日のメッセージは、能楽金剛流家夫人の金剛育子さんです)

(日本人の忘れものは、京都新聞ホームページ
http://kyoto-np.jp/kp/kyo-np/info/nwc/1/でご覧いただけます)

温故知新

はじめは吉水園

四季折々の風情が楽しめる京都東山。その昔東海道に面していた跡上は、鉄道が開通するまで東の玄関口として栄えた場所。明治二三年、この地に京都の油商 西村仁兵衛が保養遊園地として創業した「吉水園」が、ウエスティンホテル京都の前身です。そして明治三三年園内に「都ホテル」を開業し、その後平成十四年「ウエスティンホテル京都」と改名しましたが、明治・大正・昭和・平成の長きに渡って国際親善の場として、京都の文化の頭場にも携わってきました。

奈良ホテルの設立

奈良ホテル建設も当ホテルが取り組んだ大型プロジェクトでした。奈良実業協会有志や西村仁兵衛、奈良市長らの熱意から始まり、興福寺大乗院跡 御殿山の頂部に建てられました。本館は二階建 総絵造り、日本が真に世界に誇り得る国際級ホテルとして、明治四二年に完成しました。現在は都ホテルから独立した経営ですが、建設当時の風情豊かな建物は、今も多くのお客様に喜ばれています。

京の美技をちりばめて

京都でも、昭和八年に可楽庵という閑雅な和室を建設しました。奥座敷では、外国からのお客様に茶道や香道などを楽しんでもらうために、庭園は、平安神宮神苑の造園で知られる小川治兵衛氏が最晩年に手がけたものです。同氏は葵殿、稔りの間に面した回遊式庭園も手がけ、その美しさは京都市文化財(名勝)にも登録されています。観光産業華やかになりし昭和十年頃からの設計は、日本の伝統様式を巧みに取り入れる近代建築の名手村野藤吾氏が行うことになりました。当時の日本建築会の重鎮で当ホテル

深く京と関わった人々

当ホテルを長年見守ってきた役員は京都との縁が深く、昭和二年取締役就任の田中博氏は、元京都商工会議所会頭、同じく取締役就任の片岡安氏は長年建築を通して、京都という町に関わり、またのちの京都市長和辻春樹氏は、当ホテル取締役として力を注がれました。

過去を想い未来を見つめる

百二十余年の歴史と、その時の中で尽力した人々の想い、様々な出来事...ウエスティンホテル京都は、時代と共に形を変えながらも、多くの方々に支えられ、今も京の地にゆつたりと思っています。きっと、この地を愛した都人はホテルという空間に、日本の文化の精華を咲かそうとしたのかもしれない。

これからも京都の歴史を刻むホテルとして、皆さまと共にありたい。それがウエスティンホテル京都の願いです。



THE WESTIN MIYAKO KYOTO

ウエスティンホテル京都

〒605-0052 京都市東山区三条ヶあけ
tel.075-771-7111 fax.075-751-2490
www.westinmiyako-kyoto.com